

影絵師熊野風山

作 くまばは

甲府を夜中に発ち、韮崎宿から七里岩と呼ばれる崖を登った二人連れが、路傍に手頃な石を見つけて腰を下ろした。

若い武士と伴の少年である。

竹筒の水を飲みながら振り返ると、闇に沈む盆地の向こうに朝日に浮かぶ富士が見える。

あの富士のお陰で、江戸を離れなければならなくなったのだが、そうと分かっている、こうして眺める富士の姿は美しい。

武士の名は熊野真次郎。

絵師で、その師は葛飾北斎である。

そう、先前天保四年に完結した「富嶽三十六景」は大人気を博しているから、知らぬ人はいない。

師について諸国を回り、富嶽三十六景の内の何点かは、真次郎が下図を描いたのである。

それは師弟の間では当然の事であるし、何も問題はないのだが、その時「三十六景」に収録しなかった甲州、信州から見た富士の下図が十数点あった。

収録しないとは言っても、自分が描いた下図であるから、後に勉強のために彩色し、仕上がったものを、師に見せるために持って行った。

その時は、それが江戸を去る切っ掛けになるとは、知る由もなかった。

「もう灯は要りませんね」

少年が、提灯の火を消し、握り飯の包みを差し出す。

「先生。ここまでくれば大丈夫。朝飯にしましょう」

真次郎は、最前から心配していた事を口にした。

「新作。夜明け前に提灯をたよりに崖を登って来たが、誰かに見られて怪しまれたのではないかな」

「大丈夫です。宿場の者はまだ寝ていますよ」

「いや、百姓は朝が早いのではないか・・暗いうちに起き出すと聞いている」

新作と呼ばれた少年は笑いながら

「百姓なら心配ありません。ここらには狐火がよく出るんで、またお狐さんが何かしていると思うくらいのもんです」

「・・そんなものかな・・」

地元出の新作が言うのだから、そう思うしかない。

地元と言っても、新作の家はここからはまだ遠い、信濃との国境にある小荒間という村だ。

戦国の世、国境の出入りを見張る番所が置かれた土地で、新作は、その庄屋の次男坊である。

どうしても江戸へ出たいと父親を説き伏せ、人伝に真次郎の父を頼って来たのは三年前、新作が十四の時だった。

熊野家は、小禄ではあったが直参旗本で、当主で真次郎の父である熊野信義も、真次郎の兄信一郎もお役に就いていたから、生活には余裕があり、変わり者と言われていた次男坊の真次郎は、市井で良からぬ事をするよりはと屋敷内に画室を与えられ、好きな絵を描く事を許されていた。

父や兄にしてみれば、新作に変わり者の面倒を見させようという思惑であろうと真次郎は考えていたが・・・実はそれほど単純な事ではなかったのだと気付くのは後の事である・・・ともあれ、小者として熊野家に入った新作は、専ら真次郎の身の回りの世話をするようになった。

何時の頃からか、真次郎の絵の弟子を自認し、勝手に真次郎を先生と呼ぶようになった。

真次郎は止めろと言ったが、聞かないので、今はそのまま呼ぶに任せている。

お互い、次男坊という境遇から来る気楽さか諦観か、歳は七つも違うのに、何となく気の合う二人である。

新作の声で真次郎は現実に戻された。

「先生。飯はもういいですか」

「うん。充分いただいた」

「じゃあ出発しましょう。出来れば日暮れ前に大八田に付きたいんで」

二人は早速腰を上げて歩き出した。

ここは、釜無川（下流で富士川と名を変える）と塩川に挟まれた細長い河岸段丘の上で、地元では七里岩と呼んでいる。

真次郎は、以前、師の伴をして諏訪へ行った時、この崖下の釜無川沿いを歩いた事があるが、まるで巨大な屏風のように連なる岩壁に目を見張ったものである。

今はその上を歩いているというのも、何だか不思議な気持ちがある。

ちょっと上りがきつくなった所に小高い山がある。

かの武田勝頼公が織田の軍勢から甲斐を守るために作った山城で、新府城というそ

うだが、織田が攻めてくる前に退却してしまったので、この辺で合戦は無かったのだ
そうだ。

「合戦が無かったのなら、畑が荒らされなくて良かったな」

うっかり口にしてしまった真次郎に、新作は口を尖らせた。

「いやあ、とんでもねえ。守ってくれるはずの武田様が逃げてしまって、残された百姓衆はそれはひどい目に遭わされたって話です」

「そ、そうか。すまん」

「い、いえ。先生には何の関係もありません。大昔の事です。すみませんでした」

新作は詫びたが、腰に差した二本の刀が、真次郎にはとても重く感じられた。

穴山梅雪縁の能見城跡を過ぎた辺りから、道はまた起伏が激しくなり、曲がりくねって来た。

途中、小さなお宮の木陰で、昼餉に二つ目の握り飯の包みを開けた。

昨夜、甲府のはずれの農家に宿を願った二人であるが、その嫁が新作と同郷で、持たせてくれたものである。

日野、塚川、夏秋と小さな集落を過ぎて、大八田の村に着いたのは、日がかなり傾いてからであった。

「先生。今夜はここに泊めてもらいます」

石柱に「朝陽山清光寺」とあり、武田家の祖、源清光公を祀る古刹である。

立派な山門をくぐって、新作は先に駆け出して行った。

真次郎が後から歩いて行くと石段の上から声がかかった。

「先生。こっちです。」

見上げると、この寺の住職であろう、高齢の僧侶が、新作の隣で笑っていた。

僧侶は法源と名乗った。

「田舎寺故何も無いが、煩わしい者もおらぬ。安心してくつろぎなされ」

「熊野真次郎と申します。一夜お世話になります。先ず御仏にご挨拶をさせていただきませんか」

「良き心掛け哉。ご案内いたそう・・・新作はどうする・・・おや、もうおらぬわ。相変わらずだのう」

笑いながら歩き出した法源和尚の後ろを歩きながら、鐘楼の陰に隠れて見ている新作に気付いたが、真次郎は知らぬ振りをしていた。

久しぶりの湯に入っていると、新作が顔を出した。

「先生。背中を流します」

「戻って来たか。どこに行っていた」

「幼なじみに会ってきました。馬子をやってるんですが、明日の朝、小荒間まで荷を運ぶって言うんで、荷車に乗せてくれるように頼んできました」

「それは気が利くが、私はまだ歩けるぞ。こうして風呂に入って疲れも取れたしな」

新作は顔の前でひらひらと手を振ると

「先生はここから先の険しさを知らないから・・・まあ、ここは任せてください」

「そうか。では新作に任せよう」

「はい」

新作はうれしそうに笑うと、真次郎の背中をこすり始めた。

夕餉は、寺の小坊主たちが「ほうとう」というものを作った。

平たく延ばしたうどんで、とろっとした味噌味の汁に南瓜や地の野菜がたっぷり入った、何とも滋養のありそうな郷土料理で、真次郎は初めてであったが大変美味しくいただいた。

とは言え、丼に一杯が適量だったが、新作は懐かしいと言って三杯も平らげて、皆に呆れられている。

江戸はまだ残暑の厳しい日々であったが、ここまで来ると空気が違う。

夕刻以後は、まるで秋のような冷やりとした風が吹くので、こんな温かい料理がとても美味しい。

法源和尚の話は含蓄が深く時が経つのを忘れるが、朝の早い寺での行を妨げてはならないと思った真次郎は、丁重に礼を述べて部屋へ下がった。

新作は、どうも法源和尚が苦手のように、飯が済むか済まぬかのうちに、さっさとどこかへ行ってしまっている。

明日は新作の家に行き、当面はそこで厄介になる事は決まっていた。

真次郎は、その後の事など、秋の虫の声を聞きながら考えていたが、知らぬ間に眠りに落ちた。

その夜、真次郎は夢を見た。

真次郎の前に父の熊野信義、その右に師の葛飾北斎、左には兄の信一郎が居て、真次郎を見つめている。

真次郎の左後ろには、新作が控えていた。

夢である事ははっきり分かっていた。

何故かと言えば、これと同じ事が、数日前に江戸の自宅、熊野家の普段は使われない奥の座敷であったからで、真次郎自身がその確認をしているのだという意識を持っていたからである。

事実と違うのは、座敷の調度などが一切無く、ただ畳があるのみで、周囲は真っ白になって座敷が何処まで続いているのか、その向こうには何があるのかさえ分からないが、そういう状況こそが、夢である事を物語っている。

「真次郎。其方が熊野家を出る時が来た」

信義が思い切ったように口にした。

「訳をお話しいただく事は出来ませんか」

何時かこの時が来るのを、漠然とではあるが分かっていた真次郎である。

「うむ。もちろんそのつもりだ」

誰も声を出す者はいない。

信義がゆっくり話し始めた。

「我が熊野家が、関ヶ原以前から徳川家に使えて来た事は存じていよう。しかし、その前は足利家・いや、それ以前から、藤原家であったり、帝であったり、時の権力者や反対勢力を利用し、我が一族の役目を果たして来たのだ。」

真次郎は、いったい何の話かと訝しげな顔をしている。

「徳川様に使えているのも一族の役目のため、つまりそれは手段であって目的ではないのだ。こう言うと、幕府を探る間者のように聞こえるかもしれぬが、そうではない」

「どうも良く分かりませんが、私たち一族に何か大きな役目があると仰せなのですね」

「左様」

信義は、前に置かれている茶碗に手を伸ばし、茶を一口飲んだ。

ふーっと大きく息を吐いて、再び話を続けた。

「一族というのは我が熊野家だけではない。今は三つの家系に分かれていて、そこに居る新作の家、甲斐信濃国境の庄屋泉水家も一族の一つだ。」

真次郎が驚きの声を上げそうになった瞬間、今まで後ろで控えていた新作がサッと三尺ほども脇へ下がり、真次郎の方を向いて畳に額を擦り付けた。

「先生。今まで黙っていて、申し訳ございません」

「い、いや。そんなことは・・・」

真次郎が言おうとした所へ信義が割って入った。

「許してやれ。時が来るまで黙っていると、わしが命じたのだ」

「時が来るまで？」

「うむ。我が一族には時折、人知を超えた能力を持った者が生まれて来る。真次郎、其方もその一人だ」

「な、な、何ですって。わ、私ですか。そ、そんな、私は剣術も下手だし、ただ絵が好きだけで・・・」

真次郎は何が何だか分からなくなった。

「そう。その絵じゃよ。真次郎」

今まで沈黙を守っていた北斎が口を開いた。

「わしが、信義殿の父上、義真殿と竹馬の友であった事は前に話したな。その義真殿は、幼いお前の持つ能力の片鱗を見逃さなかった」

「しかし、師匠。私は祖父に自分の絵を見てもらった記憶はありませんが・・・」

「幼かったから忘れておるのじゃ。いや、忘れておる方が良い事もあるうて」

そこへ信義が、

「真次郎。その絵の能力が必要なのだ。先般、富士の絵に彩色したものを北斎殿に預けたであろう。北斎殿は、その絵を我が家へお持ちくださったのだ」

真次郎は、富士の絵に何があったのだろうと疑問に思っていると、

「先生。こちらを」

と、新作が声をかけた。

新作は、見た事のない変な格好の行灯のようなものの横に立っていた。

その行灯は、人の背より少し低いくらいの大きさで、明かりが灯るであろう部分には真次郎が描いた富士の絵が貼られていた。

「では、火を付けます」

多分後ろの部分に油が入っているのであろう、新作が火打石で火を付けた。

明かりが灯り、だんだん明るくなって行く。

真次郎の絵の向こうに明かりがあるのだから、明かりが透けて、またひととき美しく絵が見える。

これもなかなか良い趣向だと、真次郎が感心していると、
「真次郎。後ろを見よ」
と、信義が言った。

「な、なんと！」

真次郎は絶句した。

そこには、富士の姿があった。

一般に幻灯や影絵などと呼ばれるものでなく、正に本物としか言いようのない、奥行きのある富士の姿があった。

「見ろ」

兄の信一郎が、小柄を投げた。

信一郎は真次郎と違い、子供の頃より武芸に励み、一刀流の免許皆伝、小柄もなかなかの腕前である。

信一郎の小柄は、五間ほど先に見える柿の木に刺さり、その揺れで、熟した柿の実が下の池に落ち、水面に波紋を広げた。

そして真次郎の耳に、小柄の刺さった音も、柿が水に落ちた音も、はっきりと届いたのである。

「もうよかろう」

という信義の声が聞こえ、新作が行灯の火を消したのであろう、目の前の巨大な富士がスーッと消えて行った。

呆然とする真次郎の耳に、今度は北斎の声が聞こえた。

「真次郎。にわかには信じられんじゃろうが、これがお前の能力であり、お前の絵の力じゃ」

自分の前にある冷めきった茶を一気に飲み干し、新作が自分の茶を差し出したのを、ひったくるようにむさぼり飲むと、真次郎はようやく落ち着いて来た。

覚悟は決まった、いや、なるようになれという所か。

荒い息を努めて整えながら、

「わかりました。で、私は何をすれば良いのですか」

「うむ。それだ。まずは新作と一緒に、甲斐の新作の家へ向かって欲しい」

先ず最初に、これが一族の大事である事。

江戸を出るのを他人に知られてはならぬ事。

熊野家では身代わりを立てるので、追っ手の心配はないが、道中の何処に敵の目があるか分からぬから、目立たぬように旅をする事。

泉水家に着いたら、当面は当主である泉水勘衛門の指示に従い、一族のために働く事。

更に新作には、

「案内をたのむ。道中、お前の知っている事を教えてやってくれ」

というのが、信義の指示であった。

「父上。身代わりは誰がするのですか？」

真次郎の問いには、北斎がにやりと笑って答えた。

「それは、これからお前が描くんじゃよ」

「師匠は、私が人や動物を描く事を禁じておられましたが、よろしいのですか」

「はっはっは、もう禁を解いてやるわい。さっさと画室へ行かんか」

「はいはい、分かりましたよ。新作。行くぞ」

真次郎が苦笑いしながら立ち上がり、新作が従った。

「真次郎。出立は明日の晩じゃ。支度をしておくが良い」

父信義の声は、どこか寂しげであった。

寺の朝は早い。

ようやく明るくなりかけた頃、本堂で勤行が始まる。

僧侶、小坊主たちが勤行に励む板の間の隅に、真次郎が端座していた。

真次郎は、気持ちのよい朝を迎えていた。

正に夢から覚めたような朝であった。

久しぶりに風呂に入り、久しぶりにまともな布団で寝たからでもあるが、何よりここに着くまでは、どこかで敵に見られているかもしれないという不安が頭を離れず、江戸からの緊張がずっと続いていたのである。

それがこの清光寺に入る頃から、不安が消えた。

何かに守られているような、この寺の空気が緊張を解きほぐしてくれたようだ。

勤行が終わり、朝餉となる。

法源の隣の席に呼ばれたので、その話をすると、

「如何にも左様。この寺は守られておる。全ての悪しきものからのう」

「やはり、御仏の力でしょうか」

「それもある。じゃがな、一番大きいのは人の思いじゃ」

「未熟者故、なかなか自分の思いというものが、自分でもよく分かりません」

「未熟者のう。若いがなかなかの人物と見受けたが、確かに迷いはあるようじゃの」

法源は少し思案するように首を傾げた。

「まあ良い。この後、迷う事があれば、何時なりとこの寺を訪ねて参られるが良からう」

「はい。ありがとうございます」

朝餉が終わる頃、山門の方から誰かが叫ぶ声が聞こえた。

殆ど同時に、

「先生。幼なじみの三吉です。小荒間まで行く荷です」

部屋の隅から新作が言った。

いつの間にか帰って来ていて、ちゃっかり朝飯にありついていたらしい。

「ふおっふおっふおっ、こいつめ。飯だけはしっかり食いに来おるわい。真次郎殿。荷を待たせては具合が悪かろう。すぐにお発ちなされ」

法源に促されて、真次郎は急いで支度をした。

支度と言っても大した荷物はない、新作が江戸から背負って来た荷物は既に荷車の上である。

法源に改めて挨拶をし、真次郎一行は清光寺を後にした。

荷車は、足の太い大きな黒い馬が牽いている。

三吉は馬の引き綱を持ち、新作は反対側を並んで歩いている。

真次郎は荷の後ろに腰掛け、

「三吉殿。世話になる」

と、声をかけた。

「は、はい」

三吉は驚いたような声を上げた。

真次郎の耳に、ひそひそ話す声が聞こえて来た。

「新作う。おさむれえ様にどのなんち言わりちゃあ、尻いかいくなっちもうよ」

「尻いかいって、屁なんかこいちょし」

「わにわにこいちょ。ぶっさらうど」

新作も在所に帰って、地の言葉が出たようだ。

真次郎にはさっぱり意味が分からない。

しばらく行くと三吉が馬を止め、新作が真次郎に言った。

「先生。ここから坂が特にきつくなります。ほんの二丁ばかりですが、ここは荷の重さだけで馬がいっぱいいっぱいなんで、降りていただけませんか」

「あい分かった。この坂か。確かにすごい傾斜だ」

真次郎は車を飛び降りて後ろから押そうとした。

「先生。後ろはダメだ。横に回って。もしもの時、車の後ろに居たら助からない」

新作に注意され、真次郎はあわてて横に回った。

新作は反対側の横に居る。

三吉は馬の横で荷車の牽き棒をつかみ、しきりに馬に話しかけ、励ましている。

途中何度か止まりそうになったが、その度に三吉が馬の首をたたくようにして励まし、何とか登りきった。

「もういいらあ。乗ってくりよおし」

三吉が言ったが、真次郎には分からない。

「先生。乗っていいって言ってます」

「そ、そうか」

真次郎は車に乗って、

「しかしすごい坂だったな。それにしても、この馬は力がある」

「車あ二十五貫、荷が三十五貫、合わせて六十貫あるら。馬でここを登れんなあ、こいつだけずら」

今度は真次郎にも分かった。

「それはすごい。いい馬だな」

「クロつつうだよ」

三吉がうれしそうに笑うと、日に焼けた顔に白い歯が光った。

そこからしばらく、急になったり緩くなったりの坂道であったが、あの難所を超した馬には何と言う事も無く、一行は順調に登って来た。

新作は、急な所では歩き、坂が緩やかになると真次郎の隣に乗ったりした。

途中、急な斜面を巻くようにして登る狭い道があった。

そこは真次郎も車を降りて、路肩に神経を配ったが、三吉の見事な先導ですんなり抜ける事が出来た。

一旦下り、再び登って高台に出た所にある溜め池に着いた。

昼には早かったが、新作が

「腹が減った」

と言う。

時間は充分あるので馬を休ませたいという三吉の希望もあり、ここで弁当にした。

池のほとりに座り、八ヶ岳を眺めながら食べる握り飯は格別であった。

三吉が、池の浅い所へ馬を連れて行き、水を飲ませていると、

「あれ、へえ、三吉でえ。仕事け」

と、向こうの山道から老婆が顔を出した。

「ばあちゃん」

老婆は三吉と二言三言言葉を交わすと、こちらを見て叫んだ。

「新作坊ちゃん。お帰んなって」

「ブッ」

新作は飲みかけた水を吹き出すと、

「たつ婆。坊ちゃんは止めろつつったじゃんけ」

と叫びながら、あわてて駆け寄って行った。

ひとしきり大声で再会を祝していたが、真次郎が立ち上がったのを見て、こちらへ歩いて来た。

「このお方が、俺が奉公していた熊野様のご次男、真次郎様だ。これから俺の家に行く所だ」

「こりゃあ立派なお侍様じゃ。新作坊ちゃんがお世話になって」

深々と頭を下げたところへ、

「たつ婆。坊ちゃんは止めてくりよ」

と叫んだが、諦めたような顔をして真次郎に言った。

「先生。これが三吉のひいばあちゃん、俺が生まれる前から家で働いていた、たつ婆です」

「熊野真次郎と申す。しばらく新作の家で厄介になる。よろしく頼む」

真次郎が頭を下げると、

「こんな婆に頭を下げるこたあねえです。わしも長生きした甲斐があったつつうこんだ」

三吉の曾祖母ということは八十歳くらいの見当だろうが、真次郎には六十前にしか思えなかった。

いや、外見はそれなりに老婆そのものなのだが、歩く様子は危なげな所が無い。

「私はこちらの事を何も知りません。何かと教えていただく事になりそうです」

「ははは・・こんな婆に教えるこんなんねえずら。まあ、今晚、庄屋様の話を聞くこんだ」

たつ婆は、今夜、自分も泉水家に呼ばれている事を告げながら、出て来たのと反対側の山道へ消えて行った。

「変なばあちゃん、すんません」

三吉は困ったように頭を下げた。

「いや、三吉、なかなか面白かった。気にするな」

「昔っから変だったけど、腕によりをかけて変になったな」

新作が変な関心の仕方をして、三人は顔を見合わせて笑った。

小荒間村の新作の家に着いたのは八つ（午後二時）を過ぎてしまったが、ゆっくり休憩してしまったせいばかりでは無い。

村が近付くにつれ、田圃や畑のあちこちから声がかかった。

「新作坊ちゃん。お帰りなさい」

「新作さん。お帰り」

「新作う。けえったのか」

呼び方は、庄屋である新作の父との関わりか、新作自身との関わりで違うようだ。

真次郎を歓迎する言葉もあちこちから発せられた。

ただ新作を待っていたのではなく、真次郎を連れて帰るのを、皆一様に待ちわびていた様子である。

特に親しい者は荷車に駆け寄って来るので、

「ほら、ほら。危ねえずら。車に触っちゃ。こら。馬が驚くじゃんか」

みんなの気持ちがわかる三吉は、叱り飛ばしながらも困り顔である。

仕方なく馬をゆっくり歩かせたりしていたが、いよいよ止めなければならない事も度々あった。

何しろ、庄屋屋敷が見える頃には、荷車の周囲から後ろへ続く人々は五、六十人の行列になっていたのだ。

庄屋屋敷の門は立派な長屋門で、手前は道幅を大きく広げて広場のようになっている。

門の両側には土塀が続き、長さはどちらも二十間以上はあると思われるが、その先は竹藪の中に消えており、実際の広さは想像がつかない。

塀の向こうには、庭木の上部が見えるが建物の屋根は見え、更に向こうに八ヶ岳が大きく見えるだけである。

真次郎は既に、泉水家は名字帯刀を許された特別な家格である事を聞いていたが、屋敷を目の当たりにして、正に特別である事を実感していた。

門が開かれ、そこに二人の人物が立っている。

一人は、がっしりした体格に白髪頭、温厚な笑みを浮かべた五十くらいの男、庄屋泉水家の当主、泉水勘衛門。

もう一人は、よく似た体格だが少し背が高い、歳は二十二、三であろう、勘衛門の長男、大作である。

新作の父と兄は、江戸で言えば、大店の主と跡取りといった装いである。

三吉は門の少し手前で車を止め、真次郎は降りた。

新作は、真次郎より速く、車が止まる前に飛び降りて二人に駆け寄っていた。

「親父様、兄さん、ただ今帰りました」

「うん。よく戻った。ご苦労だったな」

「心配させおって」

短い言葉を交わしただけで、早速、新作が真次郎を紹介した。

「熊野様のご次男、真次郎様です。」

「当地の庄屋を努めます泉水勘衛門と息子の大作でございます」

「熊野真次郎です。お世話になります。私は・・・」

真次郎が話そうとするのを。勘衛門が目顔で止めて、

「遠路お疲れでございましょう。先ずは一休みしてください。大作。ご案内しなさい」

「はい。どうぞこちらへ。新作も一緒に。三吉。荷は中へ運んでくれ」

四人と荷車が屋敷内へ姿を消した。

勘衛門は、門前の村人たちに、

「村の衆。大勢で出迎えてくれてご苦労でしたな。ここで一杯振る舞いたい所だが、まだ日が高い。改めて六つ（午後六時）にここへ来てくれんかな」

と、大きな声で述べた。

「おお、百姓は昼間あ働かんと」

「庄屋様。ありがとうございます」

「さあ、もう一仕事するじゃん」

「晩の楽しみが出来たな」

口々に言いながら田畑へ戻って行く。

勘衛門はそれを見届けるように、しばらくそこに立っていた。

「さて、これからじゃ」

とつぶやいたが、誰も聞く者はいなかった。

真次郎は大作の案内で門をくぐったが、その広さに驚いていた。

土塀の内側二間ほどの正面に内門があり、左右は高い生け垣が巡らされて、土塀と平行に何処までも続いているように見えた。

三吉は荷車を止め、一同に頭を下げた。

「俺はこっちへ」

「三吉。真次郎様の荷物は勝手口で女衆を呼べ。他の荷はいつものようにな」
大作が指示する。

三吉は会釈して、土塀と生け垣の間を東へ馬を牽いて行く。

真次郎は、何処まで行くのかと思って見ていたが、

「どうぞお入りください」

という大作の声で、三吉の行く先を確かめぬまま内門をくぐった。

内門から玄関の間は、白い砂が敷き詰められた、ちょっとした広場になっている。

その中央を歩きながら、多分真次郎が訝っていると案じたのであろう大作が、

「泉水家は、庄屋であると同時に、この地域の警護と取り締まりの任を負っています。時により、ここは御白州として使われますので」

と説明した。

玄関の前に来ると、

「真次郎様。先ずは湯に入ってさっぱりなさってください。着替えも用意してあります」

「それはありがたい。しかし、まだまともにご挨拶もしていないのに失礼かと」

「いや、我らは元々同じ一族。遠慮は無しにしてくださいませ。新作。真次郎様を奥の湯殿へ案内して、汗を流して差し上げろ」

「はい。先生、こちらです」

新作は玄関に入らず左手の庭に入っていく。

「荷物は部屋に運ばせております。どうぞごゆっくり」

大作の声に背を押されるように真次郎は新作の後に続いた。

よく手入れされた庭で、庭木の間の小径を歩いて行くと、自然の沢水を引き込んだらしい池があった。

その池に小さな石の橋が架かっていて、

「こっちです」

と、新作は渡って行くが、その向こうには竹藪しか無い。

どこへ行くのだろうと思った瞬間、新作の姿がふっと消えた。

「こっちだと言うのだから行くしか無かろう」

真次郎は石橋を渡った。

すると、目の前の竹藪に木戸が現れたのだ。

「いちいち驚いていては新作に笑われるな」

真次郎はつぶやき、木戸を開いた。

そこには小さな庵のような建物があり、新作が入り口で待っていた。

「ここが、奥の湯殿です。どうぞ」

庵に上がると、そこは湯殿の脱衣所で、衣類を置く棚があり、既に二人の着替えが置かれていた。

「先生。驚きましたか」

「いや、そうでもない・・驚くには驚いたが、何となく大丈夫な気がしていた」

洗い場も湯船も檜作りで、湯は湯船からあふれている。

湯船の向こうには壁が無く、生け垣に囲まれた小さな庭になっていて、その外側は竹藪である。

二人は汗を流し、湯に浸かった。

「新作。なかなかの趣向だ。これは温泉だな。それにしても透明で臭いも無いが」

「そうです。随分昔から湧いているそうで、怪我や病気にすごく効くんですよ」

「ちょっと浸かっただけだが、なんとなく体が軽くなったような気がする」

「人が元々持っている力を回復させ、強める作用が湯にあるんです。これは一族しか知らない秘密の湯なんです。だから・・さっき石橋の所でちょっと変だったでしょう」

「うん。橋の向こうからは竹藪しか無くて新作が消えたように見えたが、橋を渡ってみたら木戸があった」

「そういう仕掛けがしてあるんです。私たちは結と呼んでいますが、知らないものが入れないようにしています」

「知らずに橋を渡ってくるものも居るんじゃないのか」

「いえ、その前に、普通の者にはあの石橋は見えないんです。それも含ての結なんです」

「その辺に、私の絵の不思議な力と、私がここへ来た訳がある・・だな」

「先生。そのとおりです。でも、そこから先の話は後で親父様がしますので、今は先ず旅の疲れを取ってください」

「まあいい。ここまで来て些細な事を気にしても仕方があるまい。まずはゆっくり旅の汚れを流すでしょう」

真次郎は、自分がここまで適応力があるとは思っていなかったのも、それにこそ驚いていたのだが、清光寺で感じたような安心感がいっそう強くなった事を感じていた

。

新作は、狼狽する様子も見せず些細な事と言い放つ真次郎に感心しつつも、内心ほっとしていた。

湯から上がり、用意された新しい着物を着ると、新作は、入って来たのとは反対側にある戸を開けた。

「ここから直接屋敷内に入ります」

渡り廊下のように、両側に部屋は無く、所々に窓があるが、外を見ても竹藪しか見えない。まだ日が高い時刻だが、廊下は暗い。

五間ほどで一旦左に曲がり、すぐに右に曲がると、目の前が明るくなり、庭を望む広い廊下に出た。

それは先ほど通った庭である。

真次郎が、池に架かった石橋を確かめるように眺めていると、後ろの座敷の廊下に面した障子がすーっと開いた。

当主の勘衛門が座敷の奥に座っている。

真次郎は廊下に控え、頭を下げた。

「どうぞお入りください」

障子を開けた大作が声をかけた。

真次郎は座敷に入り、勘衛門の正面に座した。

左には大作が、右には新作が座り、四方から向かい合う形になった。

勘衛門が改まった表情で、

「泉水勘衛門でございます」

と、頭を下げ、大作、新作も同時に頭を下げた。

「熊野真次郎でございます」

真次郎も頭を下げ、座敷に緊張した空気が満ちたが・・・

「ふ、ふふっ、はは、わはははっ」

突然笑い声を上げたのは勘衛門であった。

「親父様。失礼でございますよ」

「先生。すみません。こんな親父様で」

大作が注意し、新作は真次郎に取りなすが、勘衛門は笑いながら、

「ご無礼いたしました。真次郎殿があまりに緊張なさっておいでの様子で、それを見たら何だかおかしくなっていました。はは、わはははっ」

しかし、

「ふふっ、はは、ははははっ」

真次郎も、大作、新作もつられるように笑い出し、一族同士の挨拶は、一気に和やかなものとなった。

「旦那様」

廊下からの声に大作が立ち上がろうとするのを、勘衛門は軽く手を挙げて止めた。

「たつ子か。入りなさい」

女中とは違う、どこか風流人のような形をした女が滑り込むように座敷に入り、障子を閉じて頭を下げた。

「たつ子。もっと近くへ。お前が待ちわびた真次郎殿が来られたのだから」

勘衛門が促し、たつ子は真次郎と新作の間の少し後ろへ控え、顔を上げた。

歳は三十前、肌は浅黒いが顔立ちは整い、なかなかの美形であった。

真次郎が、何故この人が自分を待っていたのか訝しく思っていると、たつ子は伏せていた目を真次郎に向けた。

「あっ。あなたは」

「お分りのようすな。流石です」

勘衛門の言葉が終わらぬうちに、新作がたつ子の後ろを回って真次郎の耳元に、

「先生。誰ですか」

と、小声でささやいた。

その時たつ子が、

「新作坊ちゃんは、たつ婆をお忘れか」

と、老婆の声で一括した。

「ええっ。た、たつ婆・・・」

新作は金縛りのように動けず、口だけがぱくぱくしている。

「江戸へ発つ前、お前はまだ十四だったから教えていなかったが、ちょうど良い機会だから一緒に聞きなさい」

勘衛門の声に、新作は一応座り直したが、顔は正に鳩が豆鉄砲を食ったようなままであった。

ぼそぼそと口の中でつぶやく言葉が、すぐ隣の真次郎には聞こえていた。

「たつ婆が、婆じゃなくなった、俺が生まれる前から婆だったのに、いきなりこんなに若くなっちまって、坊ちゃんって言うなよ・・・」

真次郎が思わず苦笑を浮かべると、それに気付いた大作が声を荒げた。

「新作。一族の大事だ。しゃんとしろ」

新作の目は、一瞬で正気に戻ったようだ。

ある意味、父親より兄の方が恐ろしい場合もある事は、真次郎も子供の頃に経験していた。

「まあよい。聞きなさい」

勘衛門の話が始まった。

泉水一族・・・その起源は古い。

現在では、この泉水家はその支配地を護り、一族に関する全てを管理している。

江戸の熊野家と、もう一つ、京の榊原家が、分家として一族の役目のため、今の二大勢力の両方に、それぞれ近い所で働いている。

「一族の役目というのは、この世の中の釣り合いを保つ事です」

と、勘衛門は言った。

ある時は、勢力を均衡させ、互いに牽制させることで無用な戦を避ける事。

またある時は、一つの勢力に圧倒的な力を持たせ、他の勢力に戦を起こさせない事。

更に、どうしても戦が避けられない時は、できるだけ小さな戦で終わらせる事。

「それによって、戦の無い、民百姓が暮らしやすい国にして行く事です」

勘衛門は続けた。

ここで言う「国」とは、甲斐や信濃という国ではなく、日の本であり、大八洲の事である。

「その平安を保つ事、それが我が一族の務めです。そして、それ故に、我が一族には力も与えられ、護られてもいるんです」

真次郎の疑問を察したのか、たつ子が不意に口を開いた。

「泉水とは、出雲が変化したもの。神代からの定めです」

それを勘衛門が受けて、

「たつ子の事を言っていませんでした。たつ子は何代も前の泉家当主の妹で、当時泉水家で働いていた三吉の曾祖父に嫁いだのです」

「私がいくつに見えますか」

たつ子自身が尋ねた。

「失礼ながら、私には、三十路前にしか見えませんが」

「ほほほ、ありがとう。本当は百七十三歳ですよ」

真次郎は信じられないという顔をして、新作はまた口の中でぼそぼそ言い始めた。

「我が一族には、時に応じ人知を超えた能力を持つものが生まれて来ます。真次郎殿がそうである事はお父上から聞いておられますな」

真次郎は黙って頷く。

「たつ子もその一人で、他の者よりおよそ六倍長く生きる、いや、別の言い方をしましょう。他の者に比べ育つのに六倍の年月が必要なのです。そしてそれは、我が一族の務めを代々に間違いなく伝えて行くための力なのです」

確かに、普通の人間の寿命で代々伝えて行くとすれば、何処で行き違いがあるかも知れぬし、伝えないうちに命を終える者も居るだろう。

そのためには、たつ子のような力は有効かもしれないが、普通の人間の寿命が六十として、その六倍の三百六十歳・・たつ子には、今まで生きて来た百七十三年より更に長い年月を生きる務めがあるのだ。

普通、人は誰も長寿を望むが、そこまで桁はずれに長い人生は、本人にとってどのようなものなのだろうと、真次郎はつい考えてしまった。

真次郎の思考が分かったかどうかは定かではないが、たつ子はやや俯いて、一瞬微笑んだように見えた。

「親父様。もう村の衆が真次郎様の歓迎の宴に来る刻限です」

大作が声をかけた。

「おお、そうじゃった。現在の状況説明と、これから真次郎殿にさせていただく事など、また後ほどご説明しましょう。何しろ今はもう時間がありません」

「村の衆が来るとなると、お互いの呼び方など、決めておいた方がよろしいと思いますが」

大作が提案した。

「そうだな。とりあえず真次郎殿は親戚筋と言ってあるので、叔父と甥という事にしましょう。名字は泉水を名乗ってください」

「分かりました。では、叔父上。私の事は真次郎と呼び捨てにしてください」

「では真次郎。大作は歳も下故、呼び捨てで良いな。大作からは真次郎さんと。新作は、今のままで良からう」

大作は頷いたが、新作が口を挟んだ。

「先生の方はいいけど、たつ・・婆・・はどうなるのさ」

「他人の居る所ではいつも婆の格好じゃ。遠慮なく婆と呼ぶがいい」

またもや老婆の声で、たつ子が笑いながら言った。

座敷を出た五人が屋敷内の廊下をゆくと、すぐに廊下の幅が広がって、そこに六人の男女が控えていた。

「ここに居るのは一族の血を引く者で、特に奥向きの仕事をしています。今日はここまでで遠慮させましたが、必要な時は先ほどの座敷や奥の湯殿への出入りも許される者たちです」

勘衛門が立ち止まって説明すると、その者たちは畏まって頭を下げた。

「お待ちしておりました」

真次郎も、

「よろしく頼みます」

と、頭を下げた。

更に廊下を行くと、三寸ほどの段差が一段あり、それを降りるといきなり二十畳ほどの座敷に出た。

大作は立ち止まると振り返って、

「ここが表向きの奥座敷です。この襖の向こうに中座敷、その向こうに前座敷があります。前座敷までは、屋敷内の使用人なら誰でも立ち入る事が出来ます。」

と、簡単に説明した。

真次郎は頷きながら、ちらと後ろを見ると、たつ子は既に老婆の姿になっていた。

「その段差と、先ほどの廊下の幅が変わった所、新作が言っていた結というものでしょうか」

真次郎は小声で訊いてみた。

「ご名答です。流石ですね」

たつ子が、何故か若い声で答えたので、隣の新作はまた変な顔をしている。

「では参りましょう」

大作が襖を開けた。

中座敷を通り抜け、前座敷に入ると、十四、五人の使用人が平伏している。

中座敷は奥座敷とほぼ同じ広さ、前座敷は四十畳ほどと広がっていた。

先頭は大作、その後ろに勘衛門と真次郎が並び、その後ろに新作という順で前座敷を通り抜け、更に廊下へと進んだ。

たつ子、いや、たつ婆は他の奥向きの者たちと残り、何やら指示を出している。

その内の何人かは、何処へか姿を消し、残った者は他の使用人に指示を出し、皆が動き出した。

「真次郎。先ずは玄関から一度表へ出て、村人に挨拶をな」

「心得ました。叔父上」

既に、叔父と甥の会話になっている。

玄関から表へ出ると、時に御白州にもなるという広場に沢山の松明が灯され、百人を超す村人たちが待っていた。

ざわざわと騒がしかったのが、勘衛門が姿を見せるとぴたりと静まった。

「村の衆。よく集まってくれましたな。今日からここで暮らす事になった、私の甥、真次郎だ。よろしく頼みますぞ」

「泉水真次郎です。よろしくお願いします」

勘衛門に言われたとおり泉水性を名乗り、真次郎が頭を下げると、

「よう来られました」

「村へようこそ」

というような声が、あちこちから上がり、ざわめきが戻った。

そこへ、屋敷の男衆により酒樽がいくつも運びこまれた。

「さあ、祝い酒だ。好きなだけ飲んでください」

勘衛門の声に、村人たちは、台の上に用意された茶碗を取ると酒樽の周りに群がった。

「こら。押しちょし。酒はほうたらあるから」

「こっちの台に着もあるよ」

「酒が飲めん衆は、お茶と甘いもんがいいぞら」

屋敷の使用人たちが、手際良く村人たちに酒を注ぎ、肴を勧め、茶や餅を配る。

広場は一気に賑やかな宴になった。

宴の中から、数人の者が真次郎たちの前に進み出た。

その中の代表と思しい老齢の農夫が、

「庄屋様。今晚はお招きいただき、ありがとうございます。真次郎様。ようおいでなさいました」

と、緊張した様子で挨拶した。

「利助さん。よく来てくれました。真次郎。村の組頭の皆さんだ。利助さんは長老でな、村内の事は何でも知っておられる」

勘衛門によると・・・小荒間村は五つの「組」と呼ばれる地域に分かれており、それぞれに組頭が居て地域内の共同作業の指示などを行っている。

農作業だけでなく、病人や怪我人など、何か問題が起きたときも組頭の指示によって対応し、必要に応じ、他の組や庄屋である泉水家への連絡も組頭の務めである。

半時（一時間）が過ぎようとする頃、また利助が進み出て、
「庄屋様。真次郎様。食い逃げのようで申し訳ねえですが、何ぶん百姓は朝が勝負です、そろそろおいとまさせていただきます。今夜はごちそうになりました」

と終宴を申し出た。

「利助さん。真次郎の事、よろしく頼みますよ。また明日から精を出して働いてください。ただし、無理をしないように」

勘衛門が利助を気遣うと、利助は腰を折って深々と頭を下げた。

それを見た組頭の中でも頭抜けて体格の大きい一人が声を張り上げた。

「皆の衆。お開きじゃ。いくら飲んでも、朝の仕事に遅れるような者はおらんはずじゃが、これより後は俺も自信がねえ。引き上げるとしよう」

あちこちから笑い声が起こり、

「ごちそうさまでした」

「ありがとうございました」

口々に言いながら、村の衆が引き上げ始めた。

中には既に足下が危ない者も居て、

「ほれ、しっかりしろ。しょうがねえな」

と、仲間に抱えられるように立ち上がる者も居る。

屋敷の女衆が、子供が居る者に残った餅などを包んで持たせている。

勘衛門と真次郎は、村人が居なくなるまで、挨拶に答えながら見送っていた。

「親父様。先生。座敷の用意ができました」

そう言えば、いつの間にか大作と新作が居なくなっていたが、その新作が呼びに来た。

泉水家の一族や使用人との顔合わせの宴を準備していたのだった。

「真次郎。これからが今日の本題です」

勘衛門はわざと難しい顔を試みせたが、口元は笑っていた。

前座敷と中座敷の境の襖が取り払われ、膳が二列に並び、二十人ほどの人々が主賓の到着を待っていた。

一番手前、下座の膳が数人分空いているが、これは多分、村人たちを送り出し、後の片付けをしている者たちであろう。

続いて、膳の支度を済ませたばかりの台所の者や屋敷内の雑用をこなす者たちが並び、真次郎たちを迎えた。

中座敷に入った所からは、使用人たちの中でも指導的立場の者たち・・・最前、勘衛門が「奥向きの仕事をする者」

と言った六人の膳があったが、二つは空席となっていた。

襖を閉め切った奥座敷を背に、中央に勘衛門、その左に大作と新作が並び、勘衛門の右に真次郎、更にたつ婆が座った。

ちょうど真次郎たちが着座した頃、後片付けをしていた者たちが下座に着き、その者たちの指図をしていた、商人で言えば番頭のような外見の男が、

「おそくなりました」

と、勘衛門に頭を下げ、中座敷の二つ空いた席の一つに座した。

勘衛門は、頷き返すと

「やっと屋敷内の者だけになった。ここからは気兼ねは無用じゃ」

真次郎に話しかけ、正面を向き、居並ぶ者たちに、

「皆、今日のご苦労でした。先ず皆に、改めて真次郎を紹介しよう」

と、話し出した。

「真次郎については、既に知らせてある通り、我が泉水家の血筋でな。一族のために働いてもらう事になった。表向きは、田舎で絵の修行をしに来た私の甥として過ごしてもらおう。皆もそのように心得てくれ。・・・真次郎、挨拶を」

真次郎は緊張していた。

中座敷に席のある者は多分全てを承知の者であろうが、その他の者たちには、何処まで話して良いか分からなかったからだが、勘衛門の言葉から、ここの者たちは大丈夫であると判断し、

「真次郎です。江戸で絵の勉強をしておりました。しばらく当家にご厄介になります。よろしくお願ひします」

と、堂々と挨拶していた。

この、臨機応変な適応力を真次郎が持っている事を、勘衛門は見抜いていた。

「真次郎に、この者たちを紹介しよう」

勘衛門が、目で奥向きの者たちを見ながら言った。

「この者たちは、それぞれの役目の頭領でな。先ず、太助」

太助と呼ばれた六十近い白髪の方が、真次郎の方を向いた。

「太助は腕のいい料理人でな、この屋敷の台所頭をしておる」

「真次郎様。よろしくお頼み申しやす」

何と江戸言葉である。

真次郎が不思議そうな顔を見ると、

「餓鬼の頃から江戸で料理の修業をしておりやして、言葉も江戸流を仕込まれちゃったんで」

太助が頭を下げると、前座敷に居る台所の者たちが一斉に頭を下げた。

「台所衆の役目は、客人の食事や屋敷内の者の賄いだ。だがな、食べ物に精通する者は食べられない物にも精通しておる」

と、勘衛門が振ると、

「命あらば、いつなりと」

と、太助が返した。

真次郎は全てを理解した。

ここに居る者たちは、表向きの仕事の他に、一族の大事となれば、それを護り、敵を倒すために働く・・戦う者たちであると。

こんな調子で、女中頭の純江、蔵番頭の彦一が紹介された。

女中頭の純江は、屋敷内の細々した事に目を配り雑用をこなす女中衆を束ねるが、その女中衆は、いざとなれば主一家の命を守るために戦う女忍（おんなしのび）である。

蔵番頭の彦一は、食料や資材の調達、備蓄、会計等の管理が仕事であるが、いざと言う時のために武器や薬、資金を隠し、それを護る蔵番衆の頭領である。

ここまでは、日常は普通の仕事をしていて、他所から客が来た場合には普通に姿を見せ接客もする、泉水家の表向きの使用人でもある。

しかし、残りの三人、庭番頭の朔造、山番頭の三郎左、そしてまだ姿を見せない里番頭の霞は、表に本当の姿を曝す事のない裏の者たちだった。

庭番頭の作造は、名のとおり泉水家の屋敷と敷地を護る影の者たちの頭領で、手下は数人ということであるが、その者どもは一切顔を見せない。

山番頭の三郎左も同じような仕事だが、その受け持ち範囲は、泉水家の裏手に広がる広大な八ヶ岳全域に及び、そこには泉水一族全ての安否に関わる重要な場所も多い。

必然的に、配下の山番衆は百人を超すが、普段は獵師や杣人、或は他の村の住民として分散しており、それと気付かれる事はない。

真次郎は、この話を聞きながら、何と途方もない力を持った一族と驚きもし感心もしたが、違和感を感じる事はなかった。

自分が、正に紛れも無く、この一族の一員である事を感じ、既にそれを受け入れている事にこそ、驚いていたのである。

勘衛門は満足そうに真次郎を見て、

「もう一人、まだ来ておらぬが・・・」

と、話し始めた所へ、

「大変遅くなりました。霞でございます」

中座敷の右横、中庭に面した廊下へ出る閉じられた障子がすっと開いた。

「おお、霞か。ご苦労だった。さ、入れ。ちょうどお前の話をするところじゃ」

勘衛門に言われ、霞が空いている膳の前に座った。

急ぎ駆け戻って来たのであろう、芯の強そうな顔にうっすらと汗を浮かべ、荒い息をしている

。

洗いざらしの単衣を着ているが、急いで着替えたのか、着物は汗に濡れてはいない。

三十代半ばと思われる、色の白い小柄な女であった。

真次郎が、おやっ、と思ったとき、たつ婆が大きな声を上げた。

「霞。そなた、傷を負うておるな」

声と同時に、霞が崩れるように横へ倒れ、隣に座っていた山番頭の三郎左が咄嗟に体を支えた。

真次郎とたつ婆が霞に駆け寄り、大作と新作、そして庭番頭の朔造が勘衛門を護るように立ち上がり、他の者たちは一瞬の内に、座敷の中、廊下、中庭と、警戒の配置に付いた。

「真次郎様、代わってください」

真次郎が代わって霞を支えると、三郎左は素早い身のこなしで中庭へ消えた。

「霞。何処をやられた」

「たつ子様。わ、脇腹で・・・」

霞は意識を失ったようだ。

たつ婆は、懐剣を出すと、霞の着物を裂いた。

霞は自分で手当をしたらしく、腹部に晒が巻かれていたが、かなりの血がにじんでいる。

「医室に運ぶ。戸板を持て」

たつ婆が蔵番衆を指図し、霞を医室に運ばせ、女中衆が三人ほど後に従って行った。

屋敷内と周辺が安全が確認され、座敷は女中衆と台所衆が片付けている。

奥座敷に移った勘衛門、大作、新作、真次郎には、朔造が護衛として残っている。

姿は見せないが、作造配下の庭番衆が天井裏や床下に控えている。

間もなく三郎左が帰って来た。

「三郎左。何か分かったか」

「旦那様。山番衆の通信網で調べましたが、現在活動中の侵入者は見当たりません。霞は、我らの監視範囲外で敵に襲われ逃げ帰ったか、範囲内としても敵と戦い手傷を負いながらも敵を倒したか、そのどちらかであろうかと」

勘衛門の隣に控えた朔造が訊いた。

「他の里番衆はどうした。誰も居ないのか」

「里番衆は、明日の件に備えて、甲府、葦崎、台が原、若神子、諏訪、海ノ口などに散っておる。霞だけは、今夜の真次郎様との顔合わせのため屋敷へ戻る途中で何者かに襲われたようだ」

「霞が何処に居たのか分かれば、何処で襲われたかの見当くらいは付きそうだが、分からんのか」

大作が尋ねると、それには勘衛門が答えた。

「西は松木坂、南は清光寺坂、東は弘法坂より向こうである事は間違いない。今夜はその範囲内の結を特に強めているからな」

三郎左が後を継いだ。

「そのとおりです旦那様。真次郎様のお越しが決まって以来、我らが認めた者以外は侵入できないようにしてありますから・・・ん、少々お待ちを」

三郎左は、中座敷を通過して中庭へ出て行った。

「何か連絡があったようですね」

真次郎が何気なく言うと、

「はい。外に三郎左の手の者が一人戻って来たようです」

と、朔造が答えた。

三郎左が座敷に戻り、

「旦那様。清光寺へ行った者から連絡がありました」

「ほう。法源殿のところか」

「はい。たまたま法源様の留守の間に、霞が巡礼姿の女を寺の裏の岩牢に閉じ込めて行ったと、寺男が申しましたそうです」

「何と、清光寺の岩牢か。あそこは特別な場所。我らの力でも分からないはずだ」

朔造がため息をつく。

「まあな。だからこそ霞は岩牢を使ったのだろう。手傷を負った身で、捕らえた者をここまで連れてくる事は難しいし、敵の仲間が居れば発見される危険もある」

事情の分かった勘衛門が、

「三郎左。法源殿は何か言われたかな」

「はい。霞が怪我をされていて、寺男から晒を貰い、自分で手当てした後、こちらへ向かったらしい事。岩牢の女は、霞が何か術を用いたらしく、声をかけても、飯をやっても、座ったまま身動きもせず、ぼーっと何も見えず、何も聞こえぬかのような状態だとの事です」

何か考えていた朔造が、

「それは吾節麻根の秘薬かと。麻薬の一種ですが、それを用いて意識が朦朧としたところで命令すると、何でも言う事をききます。しかも、少し時間が経ちますと、最初に命令した者の声にか反応しなくなりますので」

真次郎が、朔造に尋ねた。

「その薬の効き目はどのくらい続くのでしょうか。また、薬のせいで死ぬ事はありませんか」

「真次郎様。毒ではありませんので、単にその薬で死ぬ事はありませんし、薬の量にもよりますが、効き目は一時ほどで切れます。しかしこれは、薬を用いて強い暗示をかける術なのです。薬の効き目は切れても、その暗示を解いてやらなければ術は持続します。命令しない限り、自分の意思では飲み食いもできませんので、いずれ痩せさらばえて死ぬ事があります」

「殺してはまずい。尋問して、正体を暴かねば・・・」

勘衛門の言葉が終わらぬうちに、一同の耳の内に、たつ婆の声が響いた。

「霞が危ない。すぐにこちらへ」

医室は、前座敷から中庭を挟んで反対側にあり、中庭を囲むように廻した外廊下を行けばすぐであったが、そこには、かなり強い結が張られているのが感じられた。

勘衛門、大作、新作、朔造、三郎左、そして真次郎の六人が医室に入ると、中央の寝台に寝かせられた霞は、短い息を弱々しく繰り返して、命の炎は消えようとしていた。

たつ婆は、それを引き止めるように、手をしっかり握り、何とも分からぬ呪文のような呟きを続けていた。

出来る限りの手が尽くされたのであろう、女中頭の純江と蔵番頭の彦一が、血に染まった布や、水が入った桶を持ったまま俯いていた。

純江が勘衛門に近付き、

「旦那様。傷からの出血は何とか止めたのですが、ここへ来るまでに失った血が多すぎて、屋敷にたどり着けたのが不思議なくらいでした」

「そうか。霞は頑なまでに生真面目なところがあつたからな。かわいそうな事をした」

勘衛門の頬を一筋の涙が伝った。

大作と新作も、こらえきれずに泣いていた。

流石に、朔造と三郎左は涙こそ見せなかったが、激しい怒りと悲しみに、瞬きもせずに霞の顔を見つめていた。

そこへ薬草を煎じた湯を持った台所番頭の太助が飛び込んで来たが、その場で肩を落とした。

真次郎が、寝台に近付き、手を霞の額にすっと伸ばした。

何故か、霞に呼ばれたような気がしたのだった。

手が霞の額に触れた瞬間、弱々しい早い息が、すーっと深呼吸のような息になり、ふっと止まった。

「今、逝きおつた」

たつ婆は、そう言って、霞の手を握ったまま俯いた。

真次郎は額から手を話し、静かに霞の顔を見ていた。

霞の白い顔は、その血を失って、正に透き通るようであったが、その頬には何故か微笑みを浮かべているように見えた。

時刻は四つ半（午後11時）を回り、間もなく日が変わろうとする頃、勘衛門、大作、新作、たつ婆、朔造、三郎左、そして真次郎の七人が奥座敷に戻って来た。

屋敷の裏（当然秘密の場所である）の堂に霞の遺体を運び密葬を済ませたのであった。

影の者は死さえ表向きに出来ない・・元々その存在自体が隠された者なのだから。

今ここに居る七人の他は、太助、純江、彦一の三人だけが霞を見送った。

密葬の始末を付けた三人が戻り、泉水一族の中核をなす十人が揃ったが、奥座敷は重苦しい空気に包まれていた。

沈黙を破ったのは勘衛門だった。

「霞の死を無駄には出来ん。霞が捕らえた者の正体を」

「はい。ですが、霞が吾節麻根を用いて術をかけたとすれば、霞が死んだ今、その術を解くのは不可能です」

朔造が答えた。

大作が、

「太助さん。吾節麻根を解毒する薬草は無いのですか」

と、尋ねたが、太助は即座に首を振り、

「吾節麻根を無効にする薬はありやせん。何より、吾節麻根の効き目はもう切れてまさあ」

「そうです。問題は術の方で、霞の声しか耳に届かない・・言い換えれば、殴ろうと、斬ろうと、何も感じません」

と、朔造が答えを補った。

「確かに。あの霞のかけた術なら、殺しても感じないくらいに効いているかも知れんな」

三郎左が、霞の死を惜しむように言った。

「一思いに冥途へ送ってやった方が、霞の供養にもなりますかな」

勘衛門が諦めたように口を開いた。

瞑目するように腕を組んで座っていた真次郎が突然尋ねた。

「医室は、まだ先ほどのままでしょうか」

「申し訳ございません。まだ先ほどのままで・・早速片付けます」

と、純江が立ち上がろうとしたのを、たつ婆が止めた。

「まあ待て。何か思うところがありそうじゃな」

「はい。霞の血を拭いた布と、それをすすいだ桶がありましたね」

「うむ。じゃが、それを何とする」

「それをここへ・・いや、私が行こう」

皆が見つめる中、真次郎は立ち上がって、

「新作。私の筆と紙を持って」

と、叫びながら奥座敷を飛び出して行く。

「はい」

新作は訳も訊かず、真次郎がまだ一度も足を踏み入れていない、真次郎の居室へと走った。

一同は啞然としてそれを見送ったが、たつ婆だけは、

「どうやら、お手並みを拝見する時が来たようじゃ。旦那様」

と、勘衛門に呼びかけた。

勘衛門は、

「そのようだな。医室へ参ろう」

と、先頭に立って奥座敷を出た。

「先生。持って参りました」

新作が、筆と紙を持って来たのと、勘衛門たちが医室の前に来たのは同時であった。

「新作。机の用意を」

「はい」

新作は、机の上の薬の容器や外科手術の道具を押し退け、画仙紙を広げた。

その間、真次郎は、諸肌脱ぎの姿で、霞の血を拭った布を手桶の水に浸けて絞っていた。

「真次郎様。何をなさるのですか」

純江が声をかけたが、真次郎は答えない。

「純江。ここは黙って見ておるしか無い」

たつ婆に言われ、一同が真次郎を見つめた。

真次郎は繰り返し布を絞っていた。

霞の出血が余程酷かったのであろう、手桶の水は、霞の血そのものと言っても良いほど真っ赤に染まっている。